

「朝鮮通信使と御馳走屋敷」

合名会社備前屋

代表社員 中野敏雄

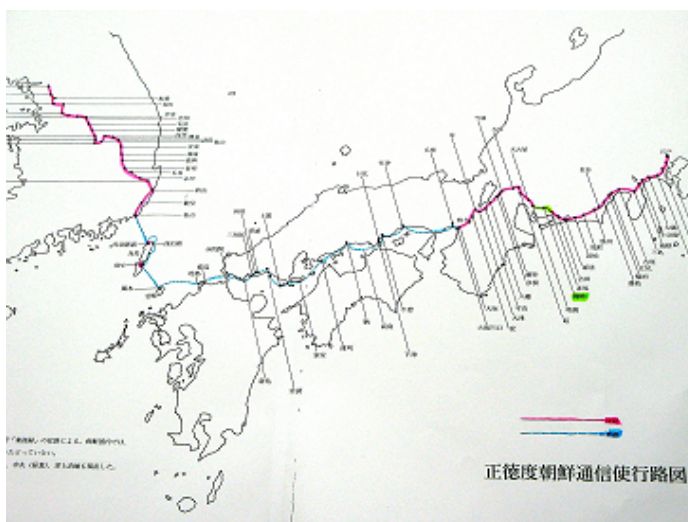


皆さんこんにちは。本日本当に多数の方に私の話を聞いていただくという機会を与えていただきまして、大変光栄に存ずるしだいでございます。

表題につきましては、ちょうど朝鮮通信使が始まりましてから 400 年という、ちょっと節目の時を迎えましていろいろなことが催しが行われておるわけでございます。もう 400 年経っておるんですが非常に日本各地でいろいろ 400 年の昔のことが残っております。一番残っておるのはお祭りとかそういったもんですね。それともうひとつは、その頃の日本ですといわゆる唐という唐子とかいろいろ、これはちょっと考えると韓国でなくて中国みたいな気がしますが、そういったことは皆、いわゆる朝鮮のことでございます。そんな事からお話をさせていただきたいと思います。

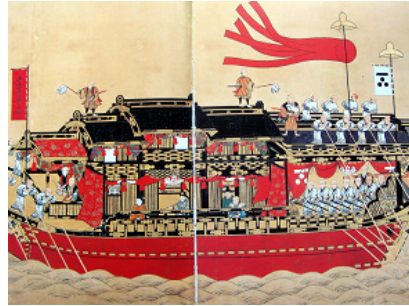
ちょっと日経新聞を持ってまいりましたけれども、これが 8 月 12 日に出たことですね。これは北斎が書きました絵でございます。こちらの方は現実にそういうお祭りの催し、これはどこですかね、静岡県の清水市ですね。すみません、今は清水区となっております。そんなことで、こういうようないろいろな形でですね、主に朝鮮通信使がもたらしたいわゆる文化、特に絵ですね、浮世絵、いろいろなことをそれに題材を付けまして描いております。そういったことをあとのプロジェクターでもご紹介を申し上げますが、随行の画員に学んだ大雅とか交流する絵心とか、そういったような表現でついております。ひとつプロジェクターでご説明を申し上げたいと思います。お願いします。

これは韓国の京城から江戸までの行程を示したものです。赤が陸路、ブルーが水色でしてあります。それぞれここで泊まったという形で、それはどこであるということが付いております。ちょうど岡崎のところがちょっとグリーンで、皆様分かっていただけのようにしてあります。主要な宿場に泊まるわけですね。

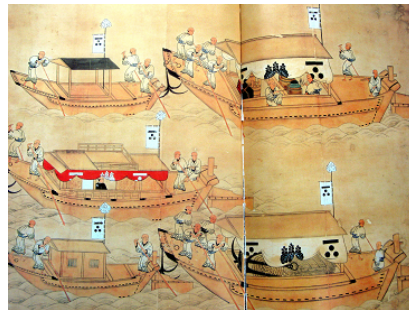


まあ今から見ますと気の遠くなるような話でして、これをとにかく 500 名という人数がですね延々とそういう行列を組んで日本に、江戸まで来てということで往復をしたわけなんです。大体数ヶ月、その時によって違いますが 5 ヶ月から長い時は 8 ヶ月 9 ヶ月もかけて往復していた。こういうことですね。

ちょっと次をお願いいたします。これはこの行程のひとつでございまして、これ旗を見ていただきますとおわかりだと思いますが、長州藩、毛利ですね、毛利の軍船なんです。中におりますのが朝鮮通信使、こういったユニフォーム、揃いのをしまして、それでいわゆる毛利の所領、いわゆる関門海峡、壇ノ浦からこういう船を仕立てて、後で申しますが大変な経費がいったわけです。ただ、昔の大名は非常に見栄を張りたがるということからですね、もう一世一代のそういうことをしたわけございます。



次お願いします。これもまあ毛利の軍船で水軍ですね。やはりこういうような形で行っております。お願いします。これあの見られたとおり竹に雀ですから宇和島の仙台藩の師範になりますが、伊達家ですね。宇和島の伊達家。仙台藩の親類にあたるのでございます。お願いします。これもこういったことで、やはり先ほど言いました狩

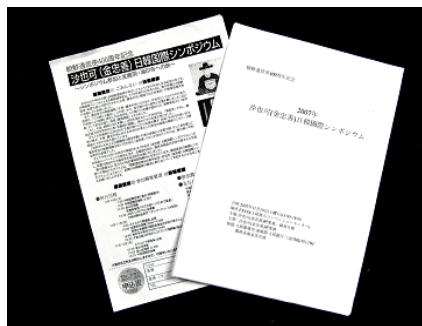


野派の絵師がこれを描き、また浮世絵にも描いております。お願い致します。これは京都に入ります、京都から伏見、こういったところの中の絵で、これで見られるとおりに大変今と違ってみんな時間がありますから、もう大変な人出だと。実際一生一度こういうことが見られれば本当に大変であるということから、この先ほどの地図で見させていただいたとおり、大変大勢の人が、または絵師達、それからそういう文章でもですね、こういったことを後まで書き続けたということでございます。お願いします。これはやはり京都の洛中洛外図ということで、京都の中を練り歩いておることです。ご存知のとおり大名行列というのがありますが、途中の道はずるずると行って、それからその手前で大きな城下町に入る時は、威儀を正して入るということですが、こういった朝鮮通信使がですね、やはりまあ良い格好をして全部の行程は無理ですからそういうことがあったじゃないかとこんなことを考えます。これは8回目のいわゆる家宣ですね、その時の雨森芳洲という儒者ですが、新井白石と同門であります、大変な活躍をしたと。対馬のいわゆるお抱えの藩士で



ございますが大変有名な方でございまして、対馬からずっと江戸まで行き帰りを付いてということで、大変な重要な役割を持った方でございます。これは司馬遼太郎の本「故郷忘れがたく候」に書かれており、もし機会がありましたら読んでいただくと大変感激的な内容でございます。これは明石書房の朝鮮通信使の本でございます。見ていただいたとおり皆韓国の方が書いてみえるんですね。東槎録はその時のいわゆる日本流にいうと旅日記、これは 12 回来た朝鮮通信使達が毎日の記録を丹念にとってですね、それで本にしております。これは江戸時代の第 7 次の時のことです。いろいろこういった本がたくさん出ております。その数はですね、日本から出た出版されたのは 400 種類、それから朝鮮からは 100 種類、そういう膨大ないろいろな方向から見た本が出ておるわけでございます。

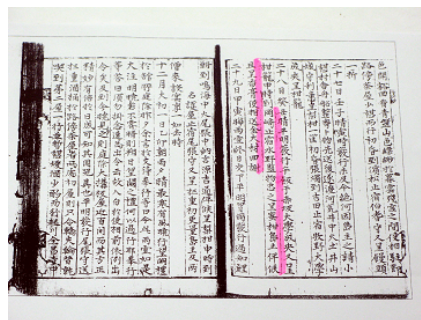
お願い致します。これはご存知かもしれませんが、沙也可と申しまして、秀吉が朝鮮を侵略しました文禄・慶長の役において、一説には加藤清正の武将だといいますが、部下と共に韓国に寝返りました。それで日本軍とも戦ったということでございまして、これ見ていただくと分かると思いますが、11 月 10 日にですね、韓国の大邱市でそのシンポジウムがあるということだと思います。そういう重要な人物で、その方の子孫も今健在であるということでございます。



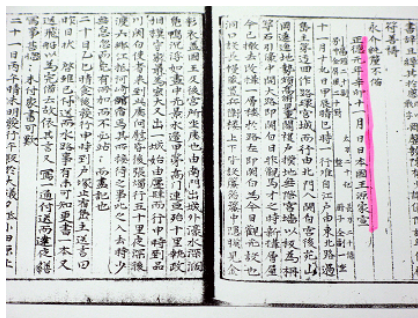
お願い致します。これはちょうど先ほど司会の方のご紹介にもありました、私どもの前にあります石像でございます。東海道に関係のあるものを全部寄せまして、その中のひとつの朝鮮通信使です。目で見ていただくとおり韓国で発行された冊子でございます。それから黄い方はこの方のことはあとお話ししたいと思います、松雲大師と申しまして僧侶でありながら武将であり、それから現地で、まあ韓国でですね、加藤清正とも講和の談判をしたと。それからもうひとつはやはりこの文禄・慶長の役が終わりまして、日本と国交を回復した時に日本に、この朝鮮通信使が来る前ですね、その講和の話をして日本まで来た人です。それでその時にはこれは伏見でそれを行ったんですが、家康はその頃はもう秀忠に政権を譲っておったもんですので、大御所として政治を執っておったわけですね。駿府から伏見までわざわざ来て、この松雲大師と話をしておいで国交に対しての合意を得ておるわけでございます。



次お願いします。これはまたあとお話ししますが、これは今の東槎録、向こうの方で旅日記と申しますか、詳細に几帳面に毎回 12 回書いておるんですが、ここに岡崎のことが書いてありま

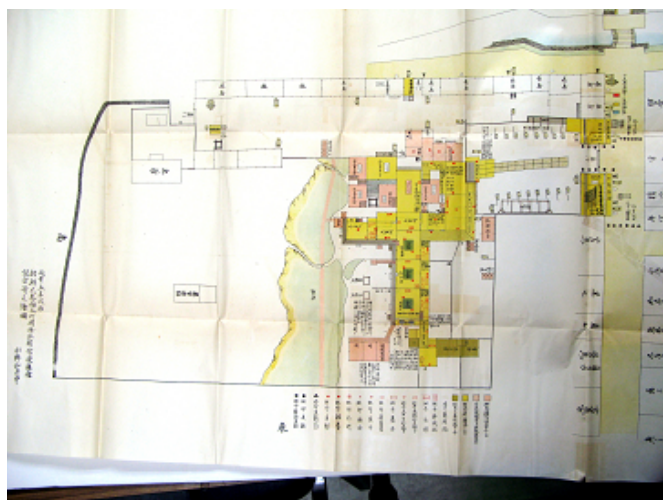


す。赤のマーカーでちょっと引いております。岡崎宿に泊まって水野監物、いわゆる岡崎は本多、水野、本多と。初めの本多と後の本多と親類筋ではありますが、ちょっと系譜が違うんですが、その真ん中が水野です。ちょっと横にそれましたが水野に関しては吉宗の時に老中筆頭となって、ちょっと遣りすぎたもんですので最終的には罷免されております。ということでこの水野監物の時にここであれですね、岡崎で泊まっておるということです。次お願い致します。それで今見ていただいて分かると思いますが、蜜柑を提供されておるということも書いてあります。これはまたあとお話しますが、正徳年号の意ですね。日本国王源家宣とこういうふうにしてあります。これ大変重要な国交に関してのことですので特にちょっと記憶に残していただきたいと思います。結局ご存知だと思いますが徳川は源、いわゆる源氏を標榜しております。信長は平家、平氏、豊臣はどうしようもないもんで特別に源平藤橘の粹外ということで豊臣という姓を朝廷から頂いて一代限りということです。はい、どうぞお願いします。



これはご存知だと思いますが御馳走屋敷でございます。ちょうど何と申しますか、籠

田の岡信さんの資料館、あそこら辺でその前側ぐらいだと思いますが、御馳走屋敷という、呼ばれる岡崎藩の迎賓館これがありまして、それでここで泊まっておると。残念ながらいろいろ調べたんですけども向こうの東槎録には御馳走屋敷なんていう名称は全然出てなく、まあ当たり前だとは思いますがね。岡崎のみの名



称だと思っていただければ。いろいろ警護もありますでしょうし、岡崎ではここが迎賓館として迎えておるという事でございます。これで大体のことがプロジェクターとしてはお話をしたわけでございます。これからはお話だけ続けさせていただきたいと思っております。

朝鮮通信使の歴史

朝鮮通信使、これは始まってから 400 年になるということを私申し上げたんですが、本当は日本と朝鮮との往来はいわゆる室町幕府の時から随分行われておるわけでございます。まあ室町幕府、足利尊氏が北条を倒して、またいろいろありましたけれども後醍醐天皇の時からですね、その時からいわゆる南北朝に分かれたということをご記憶願いたいと思います。それでいつ頃からこの朝鮮通信使というのが始まったかというのと、

足利義満の頃からです。ちょうど現在の韓国、朝鮮もですね、その時に高麗王朝が倒れまして、李王朝になったわけです。李王朝はご存知のとおり日本と併合するまでに随分長い政権でございまして、李王朝にちょうどなった時に足利義満がいわゆる室町幕府の全盛期になったでございまして、足利義満がその貿易による利権で全部自分のものにしたということを言われております。足利時代のいわゆる黄金期を開いた。金閣寺を造営する。そういったことで足利義満は先ほど話しました南北朝を、南朝を北朝にひとつ合併、合併というとおかし

いかかもしれませんが、ということで南朝方と北朝をひとつにしておるわけでございます。そういうことで室町幕府の一番最高の時期だと。これも室町幕府がご存知のとおり応仁の乱からいわゆる戦国時代に突入するまで60回に渡って使節を出しておるわけです。朝鮮だけでなく明国とも往来をしておるわけございま

すが、明国からの方はそんなにたくさんありません。ぜいぜい10分の1、しかも日本にしっかり来たのは3回と言われております。

それともうひとつは特筆することは義満は日本国王という名称になっております。日本国王としていわゆる明国の皇帝に対して朝鮮と同等な立場に立って、いわば朝貢をしておるわけなんです。ただ義満自体はそんなことは何とも思わないと。それでちょっとここで触れさせていただきたいのが、明国も朝鮮もですね、日本の仕組みが分からないということがある。日本は誰が一番偉いんだと。日本人に尋ねますとそれはもう決まっておるんですが、いわゆる天皇家というものは飾りものといっってはあれですが、今でも象徴ということであります。いわゆるその時の政権をとった人、まあ将軍、いわゆる関白、まあ征夷大將軍、こういろいろありましてどれを相手にして良いか分からないということです。向こうから見れば国王なんですね、実権を持っている。ということから国王と言う。そうすると朝鮮と同等になるわけです。明国を頭にしまして、両方ともやはりそれに対していわゆる朝貢する。それともうひとつ触れさせていただくのは、ちょっと横に逸れるんですが、いわゆる中華思想、中国のですね、これはやはり朝貢すれば近隣の国が貢ぎ物をすれば倍にして返してくれるというのが通常でございまして、それですから何ら損もないわけです。頭さえ下げておれば良い。ただいわゆる明国はその形が大切なんだということから、そういうことを足利義満は実質的なものを取ったじゃないかと。ですからその証拠にはその子供の義持だと思ったんですが、その時代になってやっぱりこれに対してこういうことは困るということで言ったものですので、一時通信使の往来とかそういったものが途絶えてしまって、実質的な国交断絶があったというこ

江戸時代の朝鮮使節一覧表

西暦	朝鮮	日本	正使	副使	従事官	使命
一六〇七	宣祖四〇	慶長二	呂祐吉	藤田一好	寛	修好
一六一七	光海君九	元和三	吳允謙	林樺	李景樞	同答兼副還
一六二四	仁祖二	寛永元	鄭堂	姜弘重	辛啓家	同答兼副還
一六三六	仁祖四	寛永二	任統	金世謙	仙石	同答兼副還
一六四三	仁祖二	寛永三	尹範之	趙綱	申淵	家綱還生
一六五五	孝宗六	明暦元	趙斤	魚場	南進賢	家綱還生
一六八二	肅宗八	天和二	尹趾元	李彦綱	朴慶後	綱吉還職
一七一〇	肅宗三〇	正徳二	趙泰國	任守幹	李邦彦	家宣還職
一七一九	肅宗三九	享保四	洪致中	黃瑤	李明彦	吉宗還職
一七四八	英祖二四	寛延五	洪致中	南泰善	南命榮	家重還職
一七六四	英祖四〇	天明四	趙金	李仁直	金相明	家治還職
一八一一	純祖一	文化八	金蘭高	金蘭求	家青還職	

とは聞いております。ただそれはまたある程度続けるようになったんですから、まあ了解したのではないかと思います。そんなようなことで、その当時先程も李氏が高麗から政権を奪取したと言いましたが、その高麗はご存知だと思いますが倭寇、朝鮮中国の沿岸を荒らしまくったいわゆる海賊。中には倭寇という名前を借りて向こうの方の盗賊も海賊も随分たくさんあったということですが、それによりまして高麗は滅びたと。それから明も非常に損害を被っておるということが言われておるわけでございますし、まあ高麗から変わった李王朝は大変そういうことで、もちろん武力で倭寇を徹底的に痛めつけております。

文禄・慶長の役

ここで徳川政権下の朝鮮通信使の発端になりました、秀吉の文禄・慶長の役に出来るだけ簡単に触れてみたいということを思っております。秀吉は日本の戦国時代ご存知のように統一しまして、もちろん隣国ですから皆んな朝鮮も明国も李王朝も知っております。そういうことで随分注目しておったと思います。明も朝鮮も李王朝も日本に対していわゆる政権をとって統一したという祝賀の使節を送っております。ただ朝鮮からもですね「速やかに信を講じ睦をおさめて、もって隣交をあつくせんとす」というようなことです。ただそういう使者を秀吉の方にも寄越しておるんですが、ここで大きな錯覚がひとつ出来てしまったということです。秀吉自体は驕りかどうかわかりませんが、いわゆる日本に従いますと言ってきた使者と勘違いをします。こちら辺が一番大きなことでございますね。まあ先ほど明からも使者が来て一応政権が交代すればやはり仲良くしよう、それから秀吉に対していわゆる祝賀の使節を送ったんですが、向こうからみるとですね、その翌年の文禄元年 4 月に秀吉は 15 万の大群を突如として朝鮮に向けたと。これは皆さんご存知のとおり、先ほど言いました文禄・慶長の役ということです。まあこれは本当に最終秀吉が死んで終息するまで 6 年間に渡ったわけです。一端引き上げてまたやはり談判決裂して、また攻め入った。今度は平壤ですね、南原城と皆言うんですが、そこで大きな決戦があったんです。先ほど出ました司馬遼太郎の本もその時に捕虜になった、島津の方に連れて帰られた、陶工、いわゆる陶器をつくる人のことが書いてあるわけなんです。その時の役ではですね、日本が圧倒的に軍勢力では勝っていた。特に向こうには鉄砲がないんです。鉄砲というものが初めてだということなんです。

これでさっき沙也可ということを申し上げた。この人は鉄砲を持って、鉄砲の製法から何から持って向こうに寝返ったのです。それから大量生産が向こうは始まるわけですね。鉄砲を持つことが出来ると火薬の原料とかいろいろなこともありますが、全てをもって向こうについたということから、やはりそれが重大な戦いの岐路を決める基になると思います。今陶器のことを申しましたけれども、島津の方に日本名で沈寿官って言うんですが、その人の事を書いた本があります。その頃薩摩ではみんな食器でも何でも木をくり抜いたようなものを使ってあって、陶器というものはなかったんです。日本はご存知だと思いますが鎖国時代ですね。そこに本当に 12 回ですが、やっぱり一生の間にいっぺん見ればということで、そういう人達が来たものですので、大陸からの文化、朝鮮からというより明からいろいろなものが入っております。日本は戦いでは戦国時代を経ておりますからどこにも負けない、特に信長など強烈な軍団、もう世界最強だと思う

んですが、持っておったんですが文化の面では甚だ劣っておったということで、それは皆んな良く知っておりますから、文化すなわちそれを持った人間をまあ今の言葉で言えば拉致するというのもひとつの計画として入っておったということは言えるわけですね。それですから各国のこちらへ投降した武将達はまとめてといいますか、そういったことで物ということではなくて、人を連れて帰ってきたということなんです。それがいろいろの形になって現在も残っておるということですね。

まあ戻りますが秀吉は朝鮮に対しては明国に入るんだからその道案内をせよと。ちょっとやはり状況と言うんですか、驕り過ぎておったということですね。そういうことでまあ秀吉が死ぬまで決裂してまた攻め入ったと。今度は相手方鉄砲もありますし、明がやはりバックアップしておるわけなんですね。秀吉の死にあって全部撤退したと。その時に大変な損害をみんな受けておるわけです、日本の武将達は。

日本と韓国とはですね、ご存知かもしれませんが古い方は神功皇后と武内宿禰の三韓征伐と。それからちょうど天智天皇が中大兄皇子の時にですね、韓国の高句麗とそれに干渉して兵を送って、その頃の少ない人口で1万人ぐらいのですね損害を被っておるわけなんですね。まあそんなようなことがありまして、どうか日本と朝鮮との間はそういう不幸な出来事が大変多かったということを申し上げておきたいと思います。

徳川幕府と朝鮮通信使

そんなようなことから文禄・慶長の役も終了しまして、それからが家康の登場になるわけですね。先ほちょっと言いました松雲大師という方、この方が会談の為に伏見までいらっしゃいました。その時家康は大師に向かいまして、「我、壬辰においてかつて兵事に預からず」という。戦いの時は、私は関東に居り、朝鮮出兵はしていないと。それから「朝鮮と我はいわゆる讐怨なし、通和を請う」ということを向こうに言った。実際はそうじゃないんですね。北九州、皆さんご存知だと思いますが、今城跡になる、名護屋ですね。北九州の名護屋に1万5千人という兵を駐留させて、秀吉の命令がもしあれば行かなきゃならんという立場にあったわけですが、そんなことは朝鮮は知っておってもやはりお互いに和平ということが一番大事であるということだったと思います。この対馬の国の藩主に宗氏というのがあり、これが秀吉の時も家康の時も、それから足利義満の時に重大な役割を全部果たしておるわけです。一時は李王朝からも俸禄も受けておる。もちろん日本からも藩としての扱い、大名としての扱いを受けて、それだからどんなこともみんな宗氏を通じてやっておるんです。そういうことで宗氏というもんが、もちろん家康の会談の時にも仲を仲介しまして計らっております。宗氏も文禄・慶長の役には当然武将として入っておるわけですが、まあ都合の悪いことはみんな口を噤んでおると。相手も分かかっておってもそれは自分の為にも見逃しておるということだと思います。それですから家康は非常に宗氏の苦しい立場といいますか、宗氏は日本と朝鮮がですね仲良くしなきゃ困るんですよ。とにかく貿易はみんなそこを經由しております。一時は倭寇にほとんど乗っ取られてた時もありましたけれども、とにかく宗氏を通じなくては何かひとつ出来ないということです。

時間もそれほどありませんので、宗氏のことだけちょっと触れさせていただきたいと思いますが、この家康との間に立ちましたのはみんな宗氏です。それから7回目でした

かね、先ほどお見せした、雨森ですね儒者の。そのようにみんな結局仲介しておるわけですね。いろいろな話を談判、それから地元の文人とか、いろいろ絵とかそういうことを朝鮮通信使が来るとその宿舎に、その土地の文人達、絵師、そういったみんな群がるんですよね。それで教えを請うということ。向こうのが初めから上と見ておるんです。朝鮮通信使の目的は12回ありましたうちの見方によって違うんですが、一番初め、二番目は刷還使、いわゆる捕虜を取り返しに行く役目なんです。日本は初めから通信使と言っておるんですが、向こうではこういう言葉は使わない、刷還使。それから今の松雲大師はいわゆる探賊使、賊を探しに行く役目だった。もう建前の国なんですよね。ですからそういうことでいわゆる刷還使、拉致された人を連れて帰るという、そういう役目をして、もって日本へ来たわけです。

すみませんちょっと元に戻るようですが、数年前に市民会館で劇団の名前は忘れましたけれども、「つばめ」という劇を私見に行きましたけれども、お行きになった方ございます、この中に。そうですか、手を挙げていただくと良くわかるんですが、行かれた方もあるんですね。大変感動的なものでして、そのことを取り上げたものです。本当に拉致された人々が本当に凄い数なんです。その時に第一次の時に連れて帰った人が2千人足らずなんです。それが目的なんです。それで第二次、第三次っていったらほとんどないんですよ。ということは日本に来てですね、その時の朝鮮よりも日本の方が身分差がないということで、能力があれば例えば今の司馬遼太郎の本でもですね、あの階級の厳しい薩摩でも土分扱いを受けているんです。沈寿官という方がですね、もう完全に日本の言葉も忘れてしまってから自分の生まれ故郷に行ったわけなんです。そこはやはり陶器の生産をやっぱりずっと続けておる。そして言葉は通じないですけども、作る工房ですね、工房でのやりとりの言葉は400年前の現在自分達が使っておる言葉と日本でも韓国でもまるきり一緒だったということで400年っていう歳月はですね、そういう技術的なことは何ら変わることはなかったという大変そういうのが結末として書いてある。感激するような内容になっております。そんなようなことが中に書いてあり、そういうことで刷還使が一説には2万人近いと言われていますが、実際大勢の人が連れてこられて、こちらでそういう武士の妻になったりしています。日本においては韓国のようにいわゆる階級差がないから、自分の能力でかなりの地位になったと、そういう人が多くて韓国に帰るということはとても考えれない。子供も生まれますよね。ところが李王朝の通信使はそれが役目で来たんですから、それを連れて帰らないと罰せられるということで、まあ分かりませんが逆拉致みたいなこともあったんじゃないかということ言われておるわけですね。そんなようなことでいろいろ家康が本当に何と申しますか、自分の意志で国交を回復したということ、これはもうどんないろいろなものを見ましてもはっきりしておるわけですし、本当の自分の意志でどんどんとそういうことを進めていく。

日本はあと鎖国に入るわけなんです、家康は絶対にそんな思想を持っていなかった。三浦按針などを登用してですね、大きな船を造り、それから秀吉に続いて御朱印船ということで随分大きな夢をもった人だということです。やはりこの朝鮮との外交についてはほとんど自分の意志ひとつで全部進めていたと。家康の意志というものはですね、家光は家康のお陰で將軍になれたことは皆さん良くご存知だと。それですから日光ですね、

あの日光を作った人なんです。ですから 2 回目でしたか 3 回目でしたかね、家光の時だけ 12 回のうちに 3 回来ておるんですよ、通信使が。もう無理矢理に日光に行ってくれと言ってですね、日光まで通信使を行かしちゃっておるということで、家康を崇拝することは凄い。

それでもうひとつ家光についてですね、今のことでちょっと横道に逸れますが先ほど対馬のことを言いました。対馬はお互いの国に国書を交わすわけですね、外交で。それは対馬の手によって行われております。もうほとんど改ざんしておるわけです。日本では日本国王なんてものは通らないですから、ですからそれを対馬ですり替えて、それから日本から出すものは対馬ですり替えるということを通常として行っておるということが言えるわけです。それが国益。ですから家康はそれは百も承知だと。承知でそれを知った上で対馬にですね相当力になってくれたということで加勢してるわけです。それで大きなちょっとこれについて騒動が起きました。これ今の朝鮮通信使のことを良く表しております。対馬の一番の筆頭家老の柳川氏っていう家老がですね、それを幕府に訴えたんです。藩主はですね、そういう改ざんを行っておったということで訴えたんです。普通ですと大変な罪なんですね国書をすり替えるなんていうこと。ただ家光は余人を交えずにその訴えた家老、柳川を死罪に処した。それで対馬の宗氏を別にお咎めはなかったということなんです。それをすれば家康自体が傷つくことになりますし、そういうことでこういう超法規的なことをですね、最高権力者として行っておるとこういうことがあったわけなんですね。

また御馳走屋敷は、岡崎のことはあまり話さんでしまったんですが、これは各地ともですね先ほど言いましたとおり向こうの目的、刷還使とかそういう目的を持っておるんですが、ただ本来目的というのは秀吉がやったようなことをしてもらいたくないということ、この意味が非常に大きいです。また、非常にプライドの高く、日本より数段文化が上であるという意識が強かったようです。

12 回に渡ってとにかく 1 回に 500 人に渡って来ておるんですから、日本からは向こうに行っていない。特に 3 代将軍の時から将軍が変わるごとに来ておるんですね。12 回目に日本が財政欠乏だからもう辞めてくれと言って宗氏だけに絞って、まあ向こうとやっておってくれんかという形になったんですよ。それですからさっきも見ていただいたとおり、各藩も見栄を張って大変な出費をしておるということで、幕府の財政が大変です。ということから自然消滅みたいな形で後は宗氏に任せた。

何故向こうから来て日本が国書を受けいれなかったのかというと、ひとつの伏線がありまして。秀吉が今の文禄・慶長の役の時にですね、向こうにいわゆるやりとりをしておるわけですね。いろいろ日本の使節も行ってるわけです。大体 3 回ぐらいですか、秀吉自体は中国を平定したら九州、九州を平定したらその兵をもって朝鮮、朝鮮を平定したらその兵をもって明まで攻め入っています。全部の制覇を成し遂げるということを信長に向かって進言したら、信長がお前大した者だといって笑ったという逸話があるんですが、そういうことが根底にありますから、そういう初めの朝鮮とのやりとりの時にですね、詳細に渡っているいろいろな攻め入るべき情報を武力、それから道のりの情報をですね、そういう使者の往来の間に全部拾って帰った。それが判明しておりますから、宗氏がそういうことで規模をうんと縮小させていったこともですね、道を決めてこの道以

外は来るではないというようなこと。それがひとつ朝鮮通信使が日本に来て日本の国としては宗氏に任してしまったという経緯でございます。

初めにちょっと申し上げようと思ったんですが、この話というのは凄い奥が深いのと幅が広いんですね。どれだけやっても尽きることがない話でございますものですので、皆様にお話したのはほんの一部でございます。少しでもこういったことをご理解願って、日韓というものは今大変難しい。また北朝鮮、今言いました拉致の問題、いろいろなことが今出ておりますが昔から難しい。非常にやはり国情も違いますし、やはり建前と申しますか、そういうことが非常に大事にする国である。ということをご理解願いまして、ちょうど時間とどんどんっておりますのでお話を終了させていただきます。どうもご静聴ありがとうございました。